
世界の外へ行きませう！

ネイブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界の外へ行きませう！

【Nコード】

N4341F

【作者名】

ネイブ

【あらすじ】

あまりにも自身の執筆状況がひどいので下げさせていただきます。お気に入り登録してくださった方、読んでくださった方、誠に申し訳ございません。

ぶろろーぐ（前書き）

こんなテンションの主人公のお話。

ぶろろーぐ

ああ、神様仏様天国のお祖母様。

私、とうとう頭が逝っちゃったのかも知れません。

自分の部屋の扉を開けた瞬間、私は真っ先に自分自身の頭の中を疑った。

既に頭の中では走馬燈がグルグルだ。あれ。走馬燈は死ぬ寸前か。うふふふ。じゃあ、私もすぐおばあちゃんの所に行くんだね。あははは。草餅用意しておいてね。私おばあちゃんの手作りが好きだから。序でに風揚げとかカルタとかしようね。あとおはじきとかーお手玉。あれ、コレだとなんかお正月っぽい？まだお正月には早いか。まあ細かいことを気にしてはいけない。そうそう、どうせ逝っちゃうんだからそんなこと気にしちゃ駄目駄目。マイナス思考なんなんてのうせんきゅうなのですよ。

頭の中は既にパンク寸前っぽいのにそんな事を全く感じさせないいつも通りの意味不明マンシンガンシンキングに、私の頭はいつも通りだと云う事を自覚する。

だとすれば目か。目が逝っちゃったのか。

本ばかり読んでるから怒っちゃったのか。今度からちゃんと緑も見ながら勘弁して下さい。本気で。本気と書いてマジと読むくらいせっぱ詰まってるんだよ？ちょっといい加減瞬きしまくってるんだからこの幻覚どっかいつてくれないかな。うふふふ何かオーバーヒートしてきた感があるんだけど。アレか、現状認識に私のメモリが追いついていないんだね。解ってるよ。だからお願いだから現実

さん、私に現状を認識させる時間を下さい。
パタンと軽い音を立てて、私は扉を閉めた。因みに一度扉を開けてから閉めるまで、たつぷり5秒くらい。

それから、私は『アレ』が何なのか、考えることから始めた。

1冊目 昔話をしましょう（前書き）

主人公である彼女の独白です。割とシリアス？

1冊目 昔話をしましょう

もう10年以上昔の話だ。その頃、おばあちゃんが脚を悪くして、一時的に私達一家はおばあちゃんの家で暮らしていた。幼い私は、友達と離れ離れになる事よりも、おばあちゃんと一緒に暮らせる事にとても喜んでいた。私のおばあちゃんは昔話を沢山知っていたからだ。

そして私は、そんなおばあちゃんが大好きなおばあちゃんっ子だった。

おばあちゃんのレパートリーは果てしなかった。西洋、東洋、亜細亜に欧羅巴。

色んな昔話の中でも、私が一番好きだったのが、『吸血鬼』の話だ。陽の光も大蒜にんにくも十字架も恐れないし、棺桶でも眠らない、どの本にも載っていない、別世界のファンタジー。私はその話が面白くて、何度も何度もおばあちゃんに話をすると強請った覚えがある。その御陰で、私はその話を空で云えるまでになった。

その物語の主人公は、普通の人で、流行病が流行っている村の子供でした。

その流行病は不思議な事に、子供にだけは罹りませんでした。

病に罹ると云われている歳は、16歳。

主人公の少女は15歳で、その日が、16歳の誕生日でした。

病に罹った人達は苦しみながら死んでいきました。そのためそれはとても恐ろしいものでした。

ですが、誰も村から出る事はできませんでした。何故なら村は山で囲まれていたからです。

山には獣が居て、とても病人や子供だけで逃げる事はできません。

それに、村には殆ど食べ物がありませんでした。別の村まで歩いて丸4日もかかります。そして山には木の実やキノコなどが1つもありませんでした。なので逃げたとしても、直ぐにお腹が空いて動けなくなってしまうのでした。

子供達はどんどん、大人になっていく事が恐ろしくなっていきました。

苦しんで死んでいく大人達を見て、死ぬ事が怖いものだと思ったからです。

生きていたいと思いながら、生き続ける事を諦めていました。

ですが、主人公の少女は違いました。死ぬ事よりも『今』を生きていこうとしたからです。

大人達も、子供達も、その少女の事を理解出来ませんでした。もうじき死ぬかも知れないのに笑っている彼女を、みんなどんどん嫌いになっていってしまいました。

少女の誕生日の前日、それは満月が綺麗な夜でした。少女は村はずれの大きな木の下で、1人の綺麗な男の人と出会いました。それは吸血鬼でした。

吸血鬼は鋭い歯を持っている事以外、人間と殆ど変わりませんでした。

唯、とても綺麗な顔をしていましたが、それ以外、吸血鬼は可笑しいくらい、吸血鬼らしくありませんでした。

少女は吸血鬼と一晩中楽しく話をしていました。少女はずっと村の中で独りだったので、話し相手が出来て、本当に嬉しかったのです。吸血鬼もにこにこ楽しそうでした。

そうこうしているうちに、夜明けがやってきてしまいました。

少女はぎゅっと目を瞑って死ぬのを待っていました。

ですが、幾ら待っても少女が死ぬ事はありません。

少女が驚きながらも村へ行くと、村からは、大人も子供も消えてい

ました。

病に罹ったのか、それとも別の何かなのかは解りません。唯、1人が死んでいました。

痛い痛いと言う声も、泣き声も、全部消えて、村で無事なのは何故か病には罹らなかつた少女と吸血鬼だけになっていました。

それから少女と吸血鬼は一緒に旅に出ました。色々な所を巡って、色々な冒険をしました。

少女にとって村の外の事は、全てが新しく、新鮮だったのです。

村の外には沢山の吸血鬼達が居て、人間もいました。

吸血鬼達は人間から恐れられ、吸血鬼達が世界の頂点でした。

それを、吸血鬼は悲しそうに見ていました。

吸血鬼は少女の事を、心から愛していました。

『僕は人間と笑って過ごしたいのに、人間達は僕から離れていってしまう。でも君は違う』

と、何度も何度も、少女何度も云いました。

吸血鬼は、吸血鬼達の王様でした。ですが吸血鬼はそれを嫌っていました。

そして独りで旅に出たんだ。と、彼は彼女に話しました。

『冒険に出たのは、僕が生まれて100年後の事。それから、もう200年になるんだ。びっくりしたかい？』と、吸血鬼は嗤いました。300年以上前から変わらないこの世界を、どう思っているのだろう。と少女は胸を痛めました。しかし、それは彼にしか解りません。

そして、彼はそれでもこの世界が好きでした。

唯、彼は王様で、たくさんの吸血鬼達から必要とされていました。

吸血鬼達には彼が必要で、彼女にも、彼が必要でした。

吸血鬼が彼女を愛しているのと同じ様に、彼女も又、吸血鬼の事を愛していたからです。

そして少女から女性になった主人公は王様である彼に提案をしました。

どちらの願いも叶いますように。と、願いを込めて、こう云いました。

『人間のいる世界と、吸血鬼のいる場所を、分けてしましましょう。そうすれば詰まらない喧嘩なんて、すぐなくなるわ』

彼も、吸血鬼達も、人間達もその提案を素晴らしいと云い、それは実行に移されました。

少女から女性になった主人公は人間で、彼は吸血鬼で、吸血鬼の王様でした。

2人は離れ離れになってしました。

2人は今でも再会を望んでいます。

千切れてしまった1つの世界。

2つ離れた世界の角で、互いの名前をずっとずっと叫んでいるのです。

永遠に、永遠に。

幼い私は、その結末に何度も涙した。なんて彼女は愚かなんだろうと歯を食いしばっていた。そんな私を見て、祖母は背中をさすりながら、私を慰めてくれた。

「なんだか、悲しいね」

「でもね、2人とも幸せになれたんだよ。吸血鬼の方はまだ生きて

いるかも知れないけど。もしかしたら、2人とも一緒にいた方が
幸せだったかも知れないけど、それでもきつと、幸せだろうよ」

「そうなの、かなあ？」

「勿論、そうだと」

おばあちゃんはとても軽やかに笑っていた。

そんなおばあちゃんが亡くなったのは去年の春。苦しみもなく、大
往生だった。

小さい頃、私は別の世界の存在を固く信じていた

でも、もう高校生だ。良い加減、空想と現実の違いくらい分かる。
それでも、確かに嫌な事があった日とか、思い通りにならない日と
か、無性に苛々した日とか、思った事はある。

『別世界が在ればいいのに』なんて。

でも人間は、そうは思っても平穏が崩れるのを厭がるものなのだ。
今までの積み重ねである日常が、非日常的な事で崩れる事を極端に
嫌う。現代日本的思考『事ナカレ主義』の産物である。かくいう
私も勿論、事なかれ主義である。

自分が今まで築き上げてきたキャラを突発的事象なんかでぶっ壊さ
れた日には、そいつに明日の朝日を拝ませてやるつもりはない。

だから思っただ。コレは幻覚なんだって。

16歳の誕生日、学校から家に帰って自分の部屋に行くと、そこ
には手乗りサイズの吸血鬼が居ました。しかもなんだか傲慢不遜な態
度でした。

お願いだから、誰か幻覚だと云って。

1冊目 昔話をしましょう（後書き）

云い訳をさせて下さい（ちょっと必死）。

これ、作者が小学生の頃に書いた物をベースにしてるんです。

あまりにも非道かつたんです

表記揺れ、誤字など、多大にあると思います（でも、でも2回も確かめたんです・・・！）

あと作者はテスト期間に入ったので、また、また（強調）消えま
す。すみません。。。

2冊目（自称）吸血鬼、登場（前書き）

やっとヒーローとヒロインが出ました。

作者には勉強する気なんてものはありません

2冊目（自称）吸血鬼、登場

「人間、オイ、聞いているのか」

「これは夢これは夢全で一夢幻想幻聴妄想空想空耳幻覚幻」

「聞けと云っているのが分からないのか人間！！」

今私の目の前でキーっとなりに怒り心頭になっているのは、私の部屋に何故か居た、手乗りサイズの人（？）だ。
この部屋の主は私だというのに、何だか振るまいが私よりも偉そう
だ。

男にしてはやや長めの銀髪に、吊り上がった三白眼はワインドレックス。口の端にはひょっこりと、牙が見えている。しかも黒くてフワフワしているけどなんかまがましい大きな翼。
ファッションとしては危ない系だ。首や腕に首輪やチェーンはジャラジャラ付いていて、黒くて大きな外套がついている。キンキン喚き立てるのは耳に心地良いはずのアルト。

これは一体なんだ？！

取り敢えず、下手に出る事にした。うん、きっとこれ、幻覚だから。大丈夫、もし現実だったら精神病院行けばいいだけだから。

落ち着け、きっと精神病院の看護婦さんは綺麗で優しいぞ（あれ、もう混乱してる気がする）！！

「……あのーどちら様ですか……？」

「僕は ガイクウ 外空からやって来た、コルメティスカ・ロザ・メイス。身分は伯爵だ。

お前は光の賢人だろう？魂を見れば分かる。お前は此処にいてはい

けない。僕と一緒に外空へ来るんだ」

云っている意味が全く分からない。理解不能だ。

ガイクウってなんだ。

何処の都市の名前だ。少なくともこの近辺にはそんな街無い。

ヒカリノケンニンってなんだ。

そんなパツと漢字表記の出来ない様な役職に就いた記憶なんかない。それでどうしてなんで私は此処に居ちゃいけないんだ自分の家だぞ？！

頭がプスプスと煙を上げ始めている。不測の事態に脳はショート寸前だ。

そんな私の腕を掴んだ（自称）吸血鬼は鏡を指さして傲慢不遜、と云うか、取り敢えず超偉そうに姿鏡を指さして、

「アレを潜れ」

と云いやがった。

確かにやろうと思えば出来る。私の身長よりも高いし。

それは決して私の身長が低いと云う訳ではなく、180センチ程の大きな鏡だという事だ。

でも、やっぱり抵抗がある（だってこれで鏡に激突したら唯の馬鹿だ）。

それに、私はまだ目の前にいる（自称）吸血鬼を信じる事ができていないのだ。

と云うか、普通に無理だ。どうしても自分の妄想の産物としか思えない（痛すぎる）。

その上この傲慢不遜な態度。私は決して温厚ではないし「石の上にも3年」とか云うアンビリーバボーな事が出来るような人間でもない。寧ろ短気だ。自覚有りだ。

私はムンズと自称吸血鬼の首根っこを掴んだ。

「知らないわよそんな事！大体何このチビッコ！チビどころかミニマム！ミニミニミニミニミニマムのくせに私に命令しよう何て良い度胸じゃない！！なんか偽物っぽいし何、何処に電池が内蔵されてんの？！」

「っ！痛いっ離せ人間！！誰がチビだ！元の姿に戻ったらお前の方がチビだ！^{ナイクウ}内空がエナの少な過ぎる下等な場所なのがいけないんだろう！！」

「今さっきからナイクウとかガイクウとかクウクウクウ意味不明な事ばかり云ってんじゃないわよ！オレンジジュースでも飲んでけってんのよ！！大体ねえ、現代日本、イヤ、世界に、吸血鬼なんて『バケモノ』が居る訳無いじゃん！！」

そう声高に叫んだ瞬間、頬を何かが横切って、背後の壁にガツと云う鈍い音がした。

頬は薄く皮が切れて血が流れていて、振り返ると背後の壁には薄い透明な板が突き刺さっていた。出所は、私が叫んだ瞬間、異様なまでの殺気を発した、手の中の自称吸血鬼。

「・・・・・・『バケモノ』だと？下等な人間が付け上がって、何を云う？我ら^{そらひと}空人は高尚で高等な生き物だ。ソレを『バケモノ』？巫山戯るな人間。お前なんか今この場で殺し、生首だけを持って行く事も可能なんだぞ・・・・？」

赤い瞳が狂気に揺らめいた。目の奥で何かが激しく燃えている。翼の黒い毛が1本1本逆立っているのが解った。

（自称）吸血鬼がグツと此方に向けてその小さな掌を向けてきた。何かを掴む様な形でその手は空中に固まっている。

一瞬で、背筋がゾクリと粟だった。

私はその吸血鬼を机の上に勢いよく投げ、素早く部屋から逃げた（「ぐえ！」とか云う潰れた音なんて聞こえなかった！）。そして素晴らしいまでの勢いでドアを閉めた。

中から何か聞こえるのは、何かの間違いだ。幻聴だ。きつと疲れてるんだ。そう云い聞かせながら、ドアに外から鍵を掛けて、私は額の汗を拭った。

「ふうー。これで一安心……………」

「……………」
「たか、人間」

「うわうぐむう???!」

がんと壁に押さえつけられて、口を塞がれた。見上げれば170センチオーバーの細身の男。
ただし、外見は中に居るはずの吸血鬼と全く同じ、だ。

「逃がすとしても、思ったか？人間……………。我々を罵倒して、あの程度で済むとでも……………」

「（生命の危機生命の危機生命の危機イイイ！！）ちょ、ドナタサマデス力……………!!」

大きくなった事で、威圧感は倍増、だ。1.5割り増しとかそんな甘い物じゃなかった。

私を見詰める（と云うか睨め付ける）ワインドレッドの瞳は怪しく、激しく揺らめいている。

それは私を、何故か懐かしい気持ちにさせた。

一瞬で恐怖を忘れて記憶の海の中へと突き落とされた。

ずっとずっと、ずうっと昔に、こんな瞳を見た気がする。ああ、で

も違う。彼の瞳は冬の湖面のような、静かで知性を湛えたブルーだ。見る角度で、水の中から太陽を見ているような輝きがあった。

彼って、誰だ。私は、何コレ、あの人を、こんな、忘れ、訳が解らな、ど、い、うし、

心の中で勝手に紡がれる言葉と思考がブツ切りにされている私の言葉が混ざり合って、訳が分からない。スパークしていく思考が、淡々としていて、感傷も何も引き起こさない、唯の確認のような、事務的な言葉に塗り潰されていく。ああ、私はこの声に、言葉に、どうして、痛い程、胸が疼くのだろうか。

「……………貴方、は、彼、の人じゃ、な……………の、ね……………
…蒼……………く、な、い……………もの……………」

「……………お前は、いや、貴方は……………?」

私じゃない、誰だ。これは。殻を破ろうとするのは。

何かに何かが、押しつぶされ、そう、で。息が、出来な、い……………?

「中に居るのなら、手荒なマネはできない」

吸血鬼は静かにそう云った。私は冬の湖面のようなブルーの中に意識を沈めた。

2冊目 (自称) 吸血鬼、登場(後書き)

ヒロインの名前未だ考えてな(r y
どっから使い回します

3冊目 ファンタジー突入（前書き）

やっとファンタジー突入です。

作者はもう勉強を諦めました（真顔）

3冊目 ファントジー突入

目が覚めたら、天蓋点きのベット（キングサイズ）で寝てました。神様コレは一体どういったご了見でしょうか。

「目が覚めたか？人間」

「・・・あー・・・えっと、なんだっけ・・・コ、コル、テ・・・チ・・・？・・・・・・コルっち！」

「殴り殺されたいのか？」

「すみません・・・」

目の前には美形。口悪いけど、それでも吸血鬼らしいです。いや、逆かな？吸血鬼だから口が悪いのかな？いやいや、コレは偏見だ。控えないといけない。

キングサイズの、一生に一度お目に掛かる事も普通はないだろう金持ち道具をしげしげと見詰める。淡いピンク色をした枕やシーツの手触りも凄く気持ち良い。これが絹織物って奴なんだろうか。

さわさわと堪能していると、耳に悪いキンキン声が聞こえてきた。

「これから我らが王との謁見がある。その薄汚い身形を正してから廊下に出る人間！」

どうやらめっちゃめっちゃ嫌われたらしい。ものすつごく嫌そうな顔でこっちを見ている。これだけ嫌われるとこれ以上何をしたらって嫌われる事もないので気が楽だ。

因みに私は、最初のあの物云いで協力者とかはあっても友達はないと判断済みだ。

「イヤ、ソレ以前に、ここは何処デスカ？」

「外空だ。お前達人間の居る世界の外にある世界だ」

「世界の、外オ・・・？」

「そうだ。僕達の世界だ。エナの豊富にある素晴らしき理想郷！」

語る視線は熱っぽくて、この世界が大好きなんだとすぐに分かる。彼はきつと、この世界で、幸せに生きて居るんだなあ。と思った。

「えーっと、まず、その『エナ』って何ですか？」

敬語なのはこの前の恐怖体験と彼がデカイから、そして信用していないからだ。

別に敬意を表している訳ではないから！と、誰かに云い訳してみたくなっただけ、そんな相手は勿論居ない。

彼は眉間に皺を寄せて溜息を吐くと、仕方がなさそうに話し出した。

「エナは生き物が生きる上で必要なエネルギーの事だ。

僕達はそれがあるから、お前達よりも長く生きるし、強靱な肉体や、強力な力を持っている。

外空はエナの発生源であるホールの近くにあるから、お前達の内空よりもエナに溢れているんだ」

「・・・で、私はなんでこの、ガイクウとやらに呼ばれたんですか？」

取り敢えず、理解する事は放置した。多分一生理解出来ない類の話だ。

だったらとつと帰ろう。今日は私の好きなグラタンだ。

友達から貰ったポッキーも食べたいし、お誕生日メールの返信もしなきゃ。

「お前が光の賢人だからだ」

「・・・なんですかそれ」

思わず呆れた声が出てしまった。むっとした顔で睨まれて慌てて顔を引き締める。

「世界が別れた話は知っているだろう？内空と外空の別離の話だ」

「いや、知りませんから」

「そんな事はない！女神が此方の世界に戻ってきた時に話したと云っていたのだから！しらばっくても無駄だぞ！」

「いや、知りませんから！女神って何だよ、どうしてそんなファンタジーな話になってるんですか。何？私は魔王でも倒しに行くんですか！」

「ん？魔王か？魔王は今ぎっくり腰で既に倒れて居るぞ？あの方も年だからな」

「居るんだ！て云うか魔王既に瀕死？！」

どうしよう。世界を侵略もしていないのに魔王もう瀕死だよ！世界中の魔王ファン、いやファンタジー好きが泣いちゃうよ？！て云うか私が泣きそう。夢がぶっ壊れた。

私が打ちひしがれているとコルツチ（この際これで呼んでやる）は私の手を取って無理矢理立たせた。

「王が待つて居る。直ぐに身形を正せ」

「はいはい」

取り敢えず鏡の前に移動して髪の毛を手串で整えたり制服をパンパンと叩いた。

それからコルツチは私の腕を掴んで歩き出した（逃げられない）。

真っ赤な長くてふかふかした絨毯の上を歩く。壁は金色で思わず見取れてしまうくらい綺麗だった。本当に何処のファンタジーだろうか。

10分くらい歩いて（広すぎる）行くと銀の鎧を着た兵隊さん達が見えてきた。その人達はコルツチを見ると直ぐさま姿勢を正している。

・・・コルツチって、実はめっちゃめっちゃ偉い？

そんな疑惑を持ちながら廊下を進むと一際大きなドアが現れた。なんかこう、王様が居そうなデカくて分厚い両開きの扉だ。

コルツチは私をチラリと一瞥すると、何の躊躇いもなくその両扉を開けた。

3冊目 ファンタジー突入（後書き）

ヒーローは

コルメテイスカ・ロザ・メイス。

ヒロインは次くらいに出てくる予定（予定は未定です。悪しからず）。

作者が名前忘れないか心配。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4341f/>

世界の外へ行きます！

2011年6月14日22時24分発行